商品貨幣説と貨幣数量説*

小幡道昭†

2006 年 3 月 24 日

1　商品貨幣について

商品貨幣という用語は、ときには、貴金属の欠乏のため、やむなくタバコやビールなどの物財が代用された場合に、金属貨幣と区別する目的で用いられることもある。商品貨幣と商品貨幣説とでは、商品貨幣の指示する内容が異なる。商品貨幣に関して、初期合衆国の貨幣史について、いくつか気になる論点が生じてきたので、議論してみたい。

浅羽 [1991] 第 4 章「マサチューセッツ植民地における代用貨幣」によると、植民地初期から 17 世紀末 18 世紀まで存続、トウモロコシが法貨規定をうけていた。さらに、バージニア植民地では「タバコ・ノート」が貨幣となったという。「政府はタバコ保蔵のための倉庫を各地に設立し、あわせて任命された検査官がそこに搬入されるタバコを調査・吟味して、良質と認められたタバコに対してのみ、預り証たるタバコノートをタバコ保蔵者に対して渡した。」(141 頁)「タバコ準備通貨」である。タバコ通過は 1600 年代初頭から流通していたが、タバコというマテリアルには通貨としての不適合があり、「安定した譲渡可能なタバコ・ノート」(155 頁) の発行を見るに至った。1713 年、金属貨幣の不足とタバコ貨幣の基本的な欠陥とを背景に、より安定した植民地内通貨の発行を企図」していた。(160 頁) 以上の歴史的現象に理論的な反省をいくつか加えてみよう。

2　貨幣価値の安定性について

商品貨幣の限界として、その価値の不安定性が繰り返し指摘されているが、この点は理論的に考えるというどうなるのであろうか。

商品の引き渡しと貨幣の支払いが時間的にズレるから、支払手段という観点からみて、価値の大きさが安定的な商品が契約の単位として選好されるというのは、古くからある考え方であり、マルクスは N.W. シーニアの同じ論述を引きながら、この考え方を繰り返し否定している (Marx[1857] S.159, Marx[1858] S.206)。この考え方は一見もっともにきこえるが、そこには価値の安定性が、貨幣たることに先行する、独立の原因といえるかという問題に対するマルクスの洞察が潜む。逆に価値の安定性は貨幣となることでもたらされる可能性もある。少なくともマルクスが、商品流通に先行するかたちで、まず価値の安定性が規定できるとしなかった点は考慮に値する。時間の流れのなかで、交換力としての価値の大きさを客観的に比較することには、論理的な困難がともなう。重量のように客観的な属性として価値の安定性があり、それが根拠となって契約の単位となるという説明にマルクスが慎重だった理由はこのあたりの混同を畏れてのことかもしれない。

*ver. 0.1 2006.3.24　大学院年度末集中ゼミナール報告; 「貨幣の多態性—流通手段と支払手段」『経済学論集』2006 年 4 月、近刊) の補注。

†東京大学経済学部 obata@e.u-tokyo.ac.jp

3　貨幣の不足について

浅羽 [1991] で紹介されている代用貨幣の発生は、貨幣数量説が妥当しない例解としてきわめて興味深い。貴金属の不足は、商品諸価格の相応の上昇でいくらでも吸収できそうであるが、実際にはそうはならなかったようである。貴金属にも一般商品にもある価値の大きさが内属している以上、それを度外視した水準に貴金属で表示された諸価格が上昇するのではなく、諸商品のなかから貨幣性を具えた代用貨幣が登場し、それぞれの価値の大きさを基準にした価格関係が維持されたのではないかと考えられる。

4　商品貨幣説について

商品貨幣説という場合には、金属貨幣を含めて、貨幣はあくまで特殊な商品であると主張する諸説がこう総称され、一般には金属主義的貨幣観がその典型をなすとされ、紙券や象徴が貨幣の本質だと捉える表券主義的貨幣観に対置されるようである。この場合、商品を物財と混同すると、ただ金か紙かといった即物的な外観による区別となり、あえて商品貨幣＜説＞とよぶほどの＜理論＞的内容も霧散する。一般に商品貨幣説といわれる場合は、商品が基礎になって貨幣が説明できるという論理的先行性、物財一般から商品を区別する価値の存在に着目し、商品価値の発展した形態として貨幣を説明しようとする論理的基底性を根底にする立場を含意するものといってよい。したがって逆に、商品貨幣説に対立する立場を厳密にとると、それ自身商品ならざるもの、本来価値をもたぬものが貨幣になる、という外在説、外形はなんであれ、価値尺度なり交換の媒介なり、貨幣の本質と考える役割を果たすものが貨幣なのだ、という機能論的規定の方向に狭められ、実際の境界線は曖昧となる。

5　預かり証書と信用貨幣

ここでは、預かり証書が事実上、タバコ準備通貨として捉えられている。この種の預り証は信用貨幣とどういう関係にあるのか、原理的に、貨幣の本性を捉え返すための手がかりがあるように思われる。

1990 年代後半からアングロ・サクソン系の研究のなかで、マルクス貨幣論をめぐる論争がみられる。それは「信用が、そして信用のみが貨幣である」(Innes[1913] p.31) と説くインネスの論文の再評価を伴いながら展開された Ingham[2004] に代表される新たな表券主義的貨幣論を一つの契機とする。この立場からは、バーター取引から出発してその効率化をもたらす手段として、交換の媒介物として貨幣を捉えてきたオーソドックスな純経済学的な貨幣生成論が理論的に仮想状況にあわせて貨幣概念を狭めてきたことが批判され、貨幣の本質はなによりも一律な価値表現の尺度を与えるところにあるという立場が提示される。それはまた、商品経済の内部から内生的に交換手段として貨幣が発生するのではなく、それに還元できない独自の社会的な基礎が不可欠になるという主張と結びついている。こうした観点から、マルクスもまた、古典派的な媒介物説を再生産しているだけであり、その商品貨幣説ゆえに貨幣を、計算貨幣 money of account にもとづく抽象的価値 abstract value として捉えることに失敗していると批判する（Ingham[2004] p.62）。しかし、ここでいわれる abstract value の内容は必ずしも明確とはいえない。

マルクスの議論を追えば、その商品貨幣説がマテリアルとしての物財貨幣を意味するものではないことは明らかである。マルクス自身、商品に内属するものとして価値を捉え、いわばその表現と

して貨幣の基本規定を求めているのであり、それはある意味で、インネスがその重要性を示唆する abstract value の一つの厳密な概念化というべきものである。

信用貨幣は、商品価値からも切断された、いわば外生的な貨幣論の系譜に属するのであり、商品価値から貨幣が発生するという、その意味では徹底的に内生説的な立場を強調する私の立場と根本的に異なる。貨幣が商品経済外的な条件を呼びこむ開口部の一つを形成しているということは、そうした外的条件のほうが貨幣の本質をなすということを意味するものではない。この点でインガムの主張にマルクス派から反論を加えた Lapavitsas[2005] が計算貨幣本質説を批判しながら、同時に貨幣の基本規定を社会的慣習 social custom 抜きに説明することはできないという。社会的基礎を強調するインガムにそのかぎりでは近い視点から、主流派貨幣論の限界を批判しようというわけである。私は逆に、主流派に対しては、社会的慣習の不可欠性よりも、信用貨幣の本源性のほうを重視する立場から、その限界を批判すべきであると考えている。

マルクスの支払手段論も、ある意味では、債権債務関係の形成を、商品経済の内部に限定することなく、広く捉えるものとなっている。債権債務関係に非商品経済的な要因を織り込みながら、決済手段としての貨幣に絶対性をもたせるところに特徴がある。それはあと一歩で、国家による強権が貨幣を支えるとみる主張に近づいているのではないか、と思われる。支払手段論において、債権債務関係の形成の根拠を、商品流通の内部から発生するものとして捉えることができないと、この側面だけ取りだしたときには、法貨規定にアクセントをおく貨幣論は貨幣国定説に帰着するおそれがある。

註

参考文献

[1] Ingham, Geoffery, *The Nature of Money* 2004

[2] Innes, A. Mitchell, "What is Money?" *The Banking Law Journal*, May 1913 , in *Credit and State Theories of Money*, ed. by Randall Wray, 2004

[3] Lapavitsas, Costas, "The social relation of money as universal equivalent: a response to Ingham" in *Economy and Society* 34-3, Aug. 2005

[4] Curtis Putnam Nettels, *The money supply of the American colonies before 1720*, in University of Wisconsin studies in the social sciences and history ; No. 20, 1934

[5] Marx, Karl, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie 1857-58* , in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-1.1,1.2, 1976-1981, 資本論草稿集翻訳委員訳、資本論草稿集 1,2 『経済学批判 』大月書店、1981 年,1993 年

[6] Marx, Karl, *Kritik der polistischen Ökonomie* 1859, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-2,1980, 資本論草稿集翻訳委員訳、資本論草稿集 3 『経済学批判 』大月書店、1978 年、

[7] 浅羽良昌『アメリカ植民地貨幣史論』大阪府立大学経済学部、1991 年